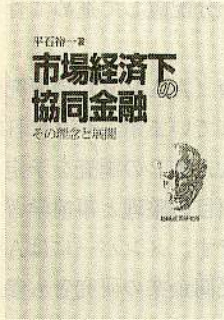


書 評

『市場経済下の協同金融』 その理念と展開

平石 裕一著 地域産業研究所 定価2800円 248頁

杉本 時哉（協同総合研究所）



本書の著者は、農協信用部門、信用金庫、信用組合、労働金庫など協同組織金融機関に働くか、かつて働いていた有志と、学者・研究者によって組織された協同金融研究会の事務局

長（元東京都信用金庫協会研究センター所長）である。既刊の著書『激動期の裾野金融』『庶民金融の心意気』の標題にも見られたように、本書でも徹底して裾野・庶民の立場から協同金融の在り方を問い続けている。「金融の自由化の『帰らざる川』をこのままくだりつづければ、地獄の海が待っている」という著者の協同組織金融機関への警告、助言、勧告が全編を貫いて極めて鮮明に展開されている。

序につづく第1章から第9章まで38節にわたる論文のそれぞれの出典は、著者自身が245頁で紹介するように一部書き下ろし、書き直しもあるが、殆どが1989年11月から1996年11月まで各紙誌に発表した論文である。この時期はちょうどバブルの頂点からバブルの崩壊へと、これまでの金融システムの内包した矛盾が一挙に噴き出した時期でもある。そして著者自身が金融機関、それも協同組織金融に身をおく立場から、悩み、問題の理解・解明に格闘した軌跡でもある。それだけに実践的で迫力がある。

第2章「金融の自由化」、第3章「バブル経済」、第5章「業務推進」、第6章「連帯性と独自性」、第7章「経営者の条件」、第9章「環境保全」にはそれぞれ「協同金融」の枕言葉や関連する表現とセットされて語られているし、第4章「金融システムのあり方」、第8章「信組・労金・農協の

方向」も、あくまで協同組織金融のあり方との関連で一貫して著者の立場は明快である。その一つの特徴を取り上げて紹介するのは紙面の都合からも無理でもあり、直接本書を読んでもらうしかない。金融の専門用語が使われていても、論旨は一般の読者にも判りやすく、著者の言わんとすることは生々しく伝わるはずである。それだけトピカルな問題意識・話題性に富んでいて、読者を飽きさせることはない。

著者の意図は、序章に集約的に表明されている。協同組織金融機関は「それぞれの経営の当面の問題解決に追われて大きな時代変化への取り組み方が不足しているのでは？」と問い「ミクロの問題を処理しながらも、マクロの問題について果敢な決意と実践」を期待する。「統制でもなく一野放図な市場経済でもない経済民主主義の方向」こそ協同組織が賛同できる世界であり、それを自覚して「人間味のある金融を広げること」を求める。

本書と同じ時期に著者と同じ協同金融研究会のメンバーでもある朝日信金の相川直之常務が『小企業経営学』（ごま書房）という本を著わしている。これも実践的な現場の立場から書かれていて示唆に富む。労働者・市民・地域の再生の立場から金融の問題領域での協同の意味を実践的かつ理念的に考える上で、この両書はぜひ読んで欲しい本である。

金融に纏わっての被害が極めて多発している今、利用者が被害者とならないためにも、金融機関の中と外との対話、協同組合教育原則の展開を筆者も期待する。